◆ 帰国子女はトラブルメーカー

戦後しばらくの間は、帰国生の数は少なく、学校の経営は大変だったようです。2代目のビクスラー理事長は、資金集めにアメリカを飛び回り、子どもたちの成長のために乳牛を飼って「啓明牛乳」を生産しました。昭和30年代になると、海外からの編入も見られるようになり、帰国生でない生徒たちの入学も増えて、学校は徐々に大きくなっていきました。

昭和40年代、日本の復興に伴って海外駐在の家族が増え、帰国生が日本各地の学校に入ってくるようになりました。啓明学園では、増えてきた帰国生たちのために、「取り出し」授業を行う国際学級のシステムを開始します。帰国生を、国内で育った生徒と同じ学級におきながら必要なときに援助を行う方式（「混入方式」とも呼ばれます）は、今でも啓明学園の帰国生受け入れの基本方針となっています。

この時代、海外からの子どもたちを受け入れた経験が乏しい学校は大きな困難に直面することになります。帰国生たちは、日本語などの学習に苦労するだけでなく、生活の感覚や価値観の違いから、集団生活になじめなかったり、人間関係に悩んだりしていろいろな不適応行動を起こします。彼らを迎える方の子どもたちや先生たちも戸惑いました。国としても対策を迫られ、啓明学園は昭和47年に文部省から「海外勤務者子女教育研究協力校」に指定されます。帰国生の数は増え続け、公立学校でも「帰国子女教育推進校」や「帰国子女教育推進地域」を指定するなど、受け入れの環境作りが進みました。

だんだんと一時のようにセンセーショナルなトラブルは少なくなっていきますが、これには、情報が行きわたるようになって、帰国する子どもたちが「いじめられないように」自衛の手段として日本の学校の文化に合わせるようになったという一面もあります。帰国生たちが、画一的で固定化していると言われる日本の学校をいい意味で揺り動かしてくれるかもしれないという期待は、残念ながら不発に終わってしまった感があります。数が増えたといっても、やはり帰国生は全国的には少数派にすぎなかったということかもしれません。

◆ 期待される帰国子女

平成に入ったころ、啓明学園と関係者がいくつかの賞を受賞しています。急激に大問題となった帰国生教育に具体的な貢献をしたことが評価されたのだと思われます。帰国子女問題は、表面的にはいくらか落ち着いた様相となり、どの学校でも一応は帰国生を受け入れることができるようになってきました。

それまで帰国生が大変苦労した大学への進学に関しても、帰国生入試がおこなわれるなどして門戸が開かれるようになります。帰国子女と分かる人たちが各分野で活躍する姿が見られ、帰国生が海外で身につけた力が評価され、期待されるようになってきました。

今の啓明学園　高校３年生と小学１年生

しかし一方、言語の違い、学習内容の違い、文化や生活の違いなどを克服していかなければならない帰国生の悩みが社会的に注目されなくなり、あまり重く考えられなくなるということにもなりました。帰国子女教育推進校などのシステムも他の教育課題に押されるようになくなっていきます。私学などで「帰国子女受け入れ校」を名乗っていても、実際には受け入れのための体制は全くない場合も見受けられるようになりました。

啓明学園では、創立時と変わらず帰国生一人ひとりと向き合う指導をつづけていますが、帰国生がもつ悩みは、以前と比べて多少形を変えているとはいえ、けっして軽くなっているとは思えません。帰国生が克服しなければならない課題は、時代が変わっても本質的には変わらず、避けられないものです。また、それだけに、それを乗り越えていく過程で子どもたちを成長させ、世界に通用する強い力を育てていくのだと思います。帰国生たちへの期待は、70年前も今も変わりません。

啓明学園　初等学校・中学校・高等学校
国際教育センター
〒196-0002 東京都昭島市拝島町 5-11-15
TEL：042-541-1003
HP：www.keimei.ac.jp　E-mail：kokusai_info@keimei.ac.jp

啓明学園70年の帰国子女教育を振り返っていただきました。私の記憶では、啓明学園は、日本で最初の帰国生受入れ校です。

帰国生の変化は、海外の子どもとその教育の変化も表しています。日本の経済の動きとの連動、国際化の広がりなどの影響が顕著です。佐々先生の「帰国生たちへの期待は‥今も変わりません」に賛成です。